学会だより　No. 86　2007 年 10 月 1 日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554　東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801　FAX：03-3238-4414　郵便振替：00140-8-194788

☆第 67 回哲学会大会のお知らせ

今秋は下記の要領で第 67 回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2007 年 10 月 28 日（日）　10：00〜16：45
会場：上智大学 7 号館 14 階特別会議室

★　プログラム

Ⅰ 研究発表　10：00〜12：00

○三浦太一（本学博士前期課程）
　プラトン『パイドン』の「想起説」における感覚の位置

○梅田孝太（本学博士後期課程）
　ニーチェ心理学における「霊魂」と「肉体」

○柿木伸之（広島市立大学准教授）
　出来事から歴史へ――ベンヤミンとハイデガーの歴史への問い――

――休憩――

Ⅱ 総会　13：00〜13：20

Ⅲ 講演　13：25〜14：25

○川本隆史（東京大学教授）
　puerilis institutio から citizenship education へ
　――《正義とケアの統合》を目指して――

Ⅳ シンポジウム　14：35〜16：45

テーマ：「世界と経験の変容――病と障害を通して――」
提題者：内海　健（帝京大学准教授）
　　丹木博一（聖母大学准教授）
　　河本英夫（東洋大学教授）
司　会：田畑邦治（白百合女子大学教授）

Ⅴ 懇親会　17：30〜19：30

会場：上智大学 11 号館 7 階会議室 3
会費：3,000 円

☆シンポジウム：「世界と経験の変容――病と障害を通して――」

新しい人間理解の道筋を

司会　田畑邦治（白百合女子大教授）

「病気」とか「病い」とか「障害」は、近代世界においては哲学的思索の主たる対象にはなりえなかった。デカルトに由来すると単純化して捉えられてきた心身二元論の隆盛の中で、哲学は精神や心を、医学や生理学は身体を、というふうにして、棲み分けが確定したかに見えた。しかし、19 世紀から 20 世紀にかけて、つまり近代の後期から現代になって、人間を心身の一体化した存在として、また理性だけでは説明することのできない個人として、さらに世界や経済といった広い意味での人間的現実の総体から捉えようとする動きが盛んになった。キエルケゴールは人間の個人の決断や信仰を重視することによって、現代の実存主義を準備し、マルクスは特に人間の物質性や社会的・経済的側面を強調して共産主義を生み出し、ニーチェは人間の情感性や身体性の偉大さを謳い上げ、またフロイトは人間の無意識の領域に科学のメスを入れようとした。20 世紀の思想界はこれらの近代思想の巨匠たちの遺産と対峙しながら、第一次、第二次世界大戦や、その後も続く戦争・紛争を経験する中で、人間存在について根源的な反省を強いられ、改めてその本質を考えようとした。

私たちが置かれているこの 21 世紀の初頭は、そうした課題を引き継ぎながら、人間が未曾有の科学技術・情報技術の発展にもかかわらず、むしろそれに反比例するかのように、一人一人の実存は確とした寄る辺を失い、孤独と疎外に悩んでいる姿に直面している。また。医学の発展や健康ブームに乗じている世界には、人間がそれでもなお病気になり、ついには死すべき運命をもっていることの意味について深く思考することを排除するかのごとき傾向が見られる。自らさまざまな精神疾患をもっていたドストエフスキーは「わたしが病気持ちであるのは、みなさんが健康であるよりも健康であることなのだ」と述べて、病気をもっていることに何かしら深い価値があることを見ぬいていたようである。

いまこの世界であえて哲学をしようとする者にとって、現代の人々がもっている様々な病気、病い、障害、狂気といったことを、人間現実として凝視することが不可欠であろう。現代の思想の最先端を歩み、同時に人間の現実に深くコミットされている三氏の提言に耳を傾けながら、新しい人間理解の道筋を探りたいと思う。

＊

★提題要旨

近代哲学と狂気

内海　健（帝京大学准教授）

およそ創造という名に値する営みには、狂気との接点がある。哲学もまた例外ではない。それどころか、狂気は古来より哲学の隠れたモチーフであり、創造へと促す重要な契機を構成していた。西欧近代において、主体と世界のかかわりに大規模な地殻変動がもたらされる中で、狂気の形象もまた大きく変貌した。精神医学が近代医学としての制度を整え、狂気の分類・整理にとりかかるのは 19 世紀初頭、つまりは Pinel 以降であるが、それに先行して哲学はきたるべき狂気を予兆していた。たとえば Descartes のコギトは悪霊という法外な否定性の到来とともに生成するが、この悪霊には夢の類比で語られる古い狂気に加えて、理性をその内部で切断する契機としての新しいタイプの狂気像が先取りされている。

さらに下ると Kant や Hegel が登場する。この 2 人は先述した Pinel の直前と直後に位置している。Kant は Hume の一撃のあとを受けて 1766 年に『脳病試論』を著すが、それぞれ感性・悟性・理性の壊乱に相当する病態を描いている。だが晩年の『人間学』では、精神疾患は Ich denke にその地位を明け渡した構想力の病として取り扱われており、古いタイプへと退行したものとなっている。他方 Hegel では、狂気は絶対精神へと収束する行程のなかに、否定性の一つの形として組み込まれている。ある意味では理性に馴致されたと言えるだろう。ドイツ観念論の系譜の中で、新しい形の狂気に最も肉薄したのはおそらく Schelling であり、彼は疾病を「自由の濫用によって自然の中に生じた不秩序」であるとした。おそらく Kant も Hegel も、自由の問題を取り扱うときに、その陰画として狂気を垣間見たのだろう。おそらく現代哲学もまた、時代の狂気と相打つ形で展開されるのではないだろうか。

＊

病気による世界変容の意味

丹木博一（聖母大学准教授）

病気や障害は健康状態と対比され、規範を逸脱した異常な状態として捉えられがちだが、異常と目される症状は、人間が生き延びるために主体を立て直そうとする活動の現れと見なすこともできる。もちろんそうはいっても病いや障害は重篤になればなるほど、人間からその自由を奪い、世界はそれまでとは比べ物にならないほど生きにくいものに変貌してしまう。人間は生命体として常に生成変化を余儀されているとはいえ、病むことは世界そのものを変調させる特別な変化として重大な危機を意味するのである。

世界の変調を哲学の主題として取り上げ、それを存在するものとその存在との差異性の変容として記述したのはハイデガーであったが、彼は世界の媒体機能が病気によって変容することについては十分な考察を行うことはなかった。病気による世界変容の意味をわれわれはどのように理解すればよいのだろうか。

ヴィクトール・フォン・ヴァイツゼッカーは、環境との出会いによる主体のそのつどの創設の運動を「ゲシュタルトクライス」と名づけ、病むことを応急的な主体の立て直しとして捉えながら、患者の生活史を通して病気の意味をラディカルに問い直した。「なぜ今ここが病んだのか」という問いかけを通して臨床例を見つめたヴァイツゼッカーは、病気の中に心的症状にも身体的症状にも交換可能なものが潜んでいるさまを見出し、病気を人間存在の表現と見なすとともに、病変とその意識化との同時的形成の仕方に繊細なまなざしを向けたのである。ヴァイツゼッカーの医学的人間学の試みを手がかりに、病気による世界変容の意味を模索してみたい。

＊

行為による世界とのかかわり

河本英夫(東洋大学教授)

理学療法、作業療法系疾患のリハビリのなかでは、身体行為の可能性を再度形成する作業が行われている。認知運動療法はそこでの先端治療法を開発し続けており、それを手掛かりに行為をつうじた世界とのかかわりの基本的なモード（カテゴリー）を取り出す作業を行いたい。まずこの治療法の説明を「認知課題」の解説をつうじて行う。行為能力不全の患者に対して、問い（選択肢）に直面するように設定するのが認知課題であり、そこから問いに解答するかたちで世界とのかかわりをみずから組織化する。このときもっとも重要な自己の組織化が行われる。このとき組織化に関与している、本人自身の仮説が知覚仮説と呼ばれるもので、それの最大の要素が運動性イメージである。

世界とのかかわりは、行為と認知では異なるモードとなるが、その点を最大限に活用するためには認知行為という固有のカテゴリー領域を設定することが望ましい。そうしたカテゴリーのなかには、ランディング・サイト（降りたつ場）のように位置を占める行為（世界と自己のかかわりを組織化するさいの蝶番となる）や、正中線（真っ直ぐや左右を可能にしている）の形成がある。これらが失われる疾患を含めて考察を行う。

☆講演要旨

puerilis institutio から citizenship education へ

――《正義とケアの統合》を目指して――

川本隆史（東京大学教授）

“Puerilis institutio est renovatio mundi.”（「若者の教育は世界の変革である。」）という過激な命題は、16 世紀のスペインで活躍したイエズス会士フアン・ボニファシオ（Juan de Bonifacio 1538～1606）が著書『キリスト教子弟教育論』（*Christiani pueri institutio adolescentiaeque perfugium* , 1575）において提唱したものであり（高祖敏明師の教示による）、「対抗宗教改革」の一翼を担った同会が取り組んだ男子教育の理念のひとつを表している。何を隠そう、この戦闘的な集団を設立母体とする広島学院（創立 1956 年）に私は学んだ（1964～1970）。第二バチカン公会議（1962～1965）を起点とする教会刷新のうねりが一地方都市のカトリック学校や教区にまで押し寄せつつあった時期であり、やや遅れて「世界の変革」を目指す若者たちの叛乱が同時多発的に繰り広げられもしていた。そうした熱い時代だったからこそ、正統なキリスト教社会倫理を説く神父にたて突いたり、「人格教育」という看板とは裏腹に受験教育一辺倒となった実情を告発しようとする運動が同校に巻き起こったのではなかろうか。大学入学後も（この修道会上層部との些細な軋轢も含めて）放蕩息子の放浪は続いたものの、結果的に社会正義論と社会倫理学を守備範囲と自任するようになった。私の研究と教育の核心がイエズス会の教育（とそれへの反発）によって形作られている、とつぶやいてみたくもなる。

そんな私が上智哲学会の大会にお招きを受ける光栄を得た。せっかくの機会であるので、《正義とケアの統合》――普遍的な公平さの実現と個別的なニーズへの応答とをどう両立させるか――という私の中心課題に定位しつつ、倫理と教育をめぐる一人称の語りを試みたい。とりあえずのゴールと見定めているのは、グローバル化を背景に世界各地で多様な展開が繰り広げられている「シティズンシップの教育」である。

☆研究発表要旨

プラトン『パイドン』の「想起説」における感覚の位置

三浦太一（本学博士前期課程）

プラトン中期作品『パイドン』は心と身体の極端な二元論を取り、真実を知る探求においては、身体や、それを通じた感覚をただ離れ去るべきものとして扱っているという解釈がなされることが多かった。アーウィンは「魂は感覚ぬきでイデアを知ることができ、ま

たイデアのように感覚では捉えられないもの、不滅のものである」と述べている。確かに、知を求める者、すなわち哲学者は、真実を探求するにあたって妨害となる身体から離れることを心がけると語られている（64c）。しかし、「想起説」と言われる箇所では、必ずしもそうはなっていない。すなわち、人が知るということは、かつて魂だけの存在であった時に学んだことを、この生において想い出すことであると述べる説（73c）においては、人はまず身体を通じた感覚から出発する。感覚によって等しいものを把握し、その個々の等しさが「等しさそのもの」という高次のイデアの知を欠いていることに気づくならば、その知を知ることができるものとしている。一見すると、知の獲得における、身体の意味づけをめぐるこれら二つの態度は相容れないもののように見える。

本発表では『パイドン』の想起説において、感覚がイデアの知を探求する上での不可欠な起点であることを示し、身体による感覚の位置づけを見直す。その上でなお、いかなる意味において感覚が「欠けている」ものとしてイデアの知には及ばないのかが示される。前半部で言われるような、身体をぬきにして魂のみでイデアを考察することは、あくまで感覚をきっかけに始まる探求の最後の過程に位置づけられるのであり、身体から離れるためにも、まず一度身体に直面し、感覚から考察をはじめなければならない。従来、全く負の面と考えられてきた感覚、身体に、探求の過程として、むしろ重要な意味を見ることで、『パイドン』の新しい読み直しを提示する。

＊

ニーチェ心理学における「霊魂」と「肉体」

梅田孝太（本学博士後期課程）

ニーチェ（1844-1900）はその円熟期の作品たる『善悪の彼岸』（1886 年）において、自らを「心理学者」と称し、「心理学 die Psychologie」が「諸学問の女王」となることを要求していた（第一章、第二十三番）。ここでいう「心理学」とは如何なるものなのか。ニーチェの考える「心理学」と、今日の我々の考える（意識についての科学たる）心理学との間にはギャップがあるだろう。ニーチェの「心理学」については、先行研究（D. M. Stingelin ら）が当時の科学的心理学からの影響関係を明らかにしている。だがニーチェの「心理学」そのものは、端的に意識を対象領域とする科学ではない。むしろ「霊魂 Seele」とは何かを問う古くて新しい思索であり、また「霊魂」に帰せられてきた「肉体 Leib」の働きに光を当てるものだということを本発表は強調するものである。

1885 年の遺稿の中でニーチェは西洋思想の根本誤謬として旧来の「霊魂」観を批判し、それに代わる「肉体」に着目している。曰く「『霊魂 Seele』が、哲学者にとって離れがた

かったのが当然なほど魅力的で神秘的な思想であったとして――おそらく今後彼らがそれと交換すべきと知るものがあるとすれば、それはさらに魅力的でさらに神秘的なものであろう。[中略]肉体 Leib は旧来の『霊魂 Seele』よりもはるかに驚くべき思想なのである。[以下略]」という（1885 年 6 月から 7 月の遺稿、36[35]より）。

そして『善悪の彼岸』においてニーチェは「霊魂」の実在を否定し、伝統的な霊魂論を「霊魂原子論」と総称して批判する(第一章、第十二番)。いわく「霊魂」は単一で客観的な実体ではなく、「死すべき霊魂」、「衝動と情動の社会構造としての霊魂」である。また「我々の肉体はまさに数多の諸霊魂の社会構造 ein Gesellschaftsbau vieler Seelen にすぎない」とされる（第一章、第十九番）。このようにニーチェは旧来の霊魂論を批判した上で、新たな霊魂論ともいうべき「心理学」を「肉体」との関連で思索している。

以上のことから、ニーチェ心理学は単に意識についての学なのではなく、霊魂と肉体との捉え方を刷新せんとする歴史的な射程をもった問題系なのである。

＊

出来事から歴史へ
――ベンヤミンとハイデガーの歴史への問い――

柿木伸之（広島市立大学准教授）

歴史とは何か。このことが現在の危機のなかであらためて問われている。

一方で、既存の歴史が不可視にしてきた記憶が語られ始めている。癒えることのない傷から呼び覚まされてくる暴力の記憶。記憶そのものが語るかのようなその証言に遭遇するとき、それに応える歴史の不在をも突きつけられることになる。その衝撃は、歴史への問いを喚起するにちがいない。しかし他方で、過去の出来事を否認し、今ようやく語り出されたその記憶を消し去ろうとする「修正主義」の動きが、歴史の実証性と物語性の両方を利用しながら、広範な影響力を獲得している。しかも「修正主義」的に仮構された神話的な物語は、過去を抹殺しながら、今や人々を新たな戦争へ駆り立てようとさえしていよう。

このような、ベンヤミンの言葉を借りるなら、「伝統の存続とその継承者を脅かす」危機が今ここにあると考えられる。そしてその危機とは、歴史そのものを試すものとさえ言えるだろう。それを前にしながら歴史とは何かと問うこと、それはこの危機をかたちづくる潮流と対峙しながら、歴史それ自体を、その可能性において見つめなおすことであるはずである。

さて、ベンヤミンが「伝統の存続とその継承者を脅かす」危機を見て取っていたのは、人類が二度目の世界大戦を経験しつつある時期であった。彼は、未曾有の破局を現出させつつある潮

流に抗うようにして「歴史の概念」を問うたのである。また、ほぼ同じ時期にハイデガーも、存在そのものを「出来事」として見つめなおし、その「出来事から」歴史をとらえなおそうとしていた。彼はこの新たな歴史のうちに、現在の「窮境」を「転回」させる「別なる始原」の可能性を求めたのである。このように、眼前の危機を見すえつつ、歴史そのものへ向かう二人の同時代人の思考は、歴史をめぐる現在の危機的な状況と対峙しながら歴史の可能性を問う思考に、いくつかの手がかりをもたらしてくれるにちがいない。本発表では、そのような見通しをもって、1930 年代後半から 1940 年にかけて書かれたベンヤミンとハイデガーのテクストに分け入り、歴史そのものの可能性を問う二人の思考をたどることにしたい。それをつうじて、歴史をめぐる現在の問題意識の一端にも触れることができればと思う。